日本教科教育学会誌
2002.12　第25巻　第3号

国語科解体・再構築の方向性

広島大学大学院教育学研究科　難　波　博　孝

国語科の現状は，私たちの「生の言語生活（＝生態）」とかけ離れている。また，国語科の改革方向は，より悪い方向に進もうとしている。この状況を改善するためには，国語科を解体し，(1)コミュニケーション(2)表現(3)思考(4)イメージ(5)思想(6)メディアの6つのモジュールに再構築すること，中・短期戦略としては，(1)国語科の「非教科」化(2)各モジュールの，関係者・学会でのカリキュラム開発をすすめること(3)教科教育研究者による，ただいまの授業研究・教師教育へのサポートを提案したい。

キーワード：教科再編，国語科，生態，生涯学習

1．国語教育の現状と困窮

学校で行われる，（あらわなカリキュムにしろ，隠れたカリキュラムにしろ）「ことばのカリキュラム」によって，子どもたちのことばは，どのように育まれ，与えられ，奪われ，抑圧されてきたのか。国語科教育の実践の改善を考えるためだけにしても，その実体を観察し，構造を記述することは，不可欠のはずである。

しかし，今までの国語科教育は，授業の実態を記述し，その授業が子どもの「ことば」にどのような影響を与えたのか，また与えなかったのか，あるいは，子どものことばのどの部分は抑え込んでしまったのか，を研究したものは，少なかった。まして，その授業で子どもの「生活のことば」がどのような変容を被ったかを研究したものは非常に少ない。

ただ，教師や研究者が「新しい」あるいは「よい」と称する授業が提案され，学びの検証もされることなく，教師や研究者の業績として積み重なっていっているのである。まさしく，学習者は授業のサブジェクト，つまり，忠実なる僕として扱われている。学習者は，授業実践に搾取されるだけでなく，国語科教育そのものからも搾取されている。

では，具体的に，現状の国語科教育の実践／研究にはどのような問題点があるのだろうか。

一つは，あくまで教師側の視点から，研究されており，個々の学習者という視点は乏しい，と言う点である。国語科教育の実践／研究に登場する学習者は，教師の目から見た実践の「対象（オブジェクト）」に過ぎず，教師のサイドから切り取られた「学習者」の姿である。

二つ目の問題点は，日常の言葉の生活の関わらせようとする視点の乏しさである。現状の国語科教育の実践／研究が，最終的には授業改善という方向を目指しているため，その研究の視野は，授業の外に広がっていかない。

しかし，私たちが関わっている，国語教育－言葉の教育－という観点から見たとき，言葉を学ぶ場は，授業以外の方がはるかに時間的・空間的な量的な面から見ても，また質的な面から見ても，大きいはずである。授業以外の場面でどのように学習者がことばを学んでいるかは，授業での学習者のことばのまなびを考える上でも，本来は欠かせないはずである。

同じことは教師にも言える。例えば，家庭を持つ教師であれば，子育ての経験から得たものが，教育的な信念の形成に影響を与えるということを否定できないだろう。教師の側面から見ても，学校以外の場面における，言葉の学びの姿を捉えていかなければならない。このように，授業に関わる，学習者と教師の双方について，その「ことば」の有り様を見るためには，授業以外の「ことばの学び」の姿を見る必要があるのである。

教師や学習者の，日常のことばの姿を見ていこうとすると，どうしても，そのことばが長期にわたってどのように形成されてきたかを，みていかなくてはならない。なぜなら，その言葉が日常的であればあるほど，その言葉を位置づけるためには，その人の生きてきた歴史の中で行わなければならないからである。

国語教育が以上のような方向性を目指さなければならないのであるなら，現状の国語科教育の枠組みで果たしてやっていけるのだろうか。

2．国語教育の「改革」の方向

1で示したような方向性を，これからの国語科は目指さなければならない一方で，国語教育の公的な「改革」はどのように進められているだろうか。

2002年度（小・中）2003年度実施の学習指導要領では，それまで表現／理解／言語事項という2領域1事項だった国語科が，話すこと・聞くこと／書くこと／読むこと／言語事項という3領域1事項に組み替えられた。ただ，そのこと自体は大きな事柄ではない。せいぜい話すこと・聞くことが新設され，その重視が公的に宣言されたことや，この中に「話し合う」という指導事項が組み込まれたことぐらいが注目されることだろう。授業時数が減ったことや，漢字を2学年にわたって教えてもよいことも，それほど大きな変化とは思われない。

問題は，評価が相対評価から絶対評価に変わることにより，国語科の授業が今まで以上に，平板化したものになりかねないことが起こっていることである。

どういうことかというと，学習指導要領に拠って作られた，国立教育政策研究所の「評価規準」が，各学校の絶対評価のための基準となり，ひいては，授業そのものの形成にも大きな影響を与えていることである。

例えば，「読むこと」の評価規準の具体例の中の，文学的な文章に関わると考えられる箇所は次にようになっている。

- 登場人物について心情や性格，考え方などを多面的にとらえて人物像をまとめている。
- 情景描写などの表現に着目して読み味わっている。

このような記述はこれまでの指導要領の方向性とそう変わるものではない。しかし，従来は，このような記述をふまえながらも，個々の教師が教室の学習者や地域，教材に合わせて，授業の目標を加えていた。例えば，戦争児童文学の教材を扱うなら，「戦争や平和について自分なりの考えをもつ」のように。

ところが，現在は，評価規準が絶対化され，授業がこの方向性でのみ評価されようとするだけでなく，授業内容そのものも縛られてしまい，たとえ戦争児童文学の教材であっても，登場人物の人物像をまとめ情景描写を読み味わう，だけの授業を作ろうとする動きが出始めているのである。評価規準の「絶対化」である。

こういった動きが広まってしまい，評価規準に沿った内容だけの授業が国語科で横行し始めると，ますます，「生の言葉」「生涯の言葉」から，国語科は離れていってしまうのである。

3．国語科解体・再構築の方向性を探る

では，どのように国語科を考え直していけばいいだろうか。そのヒントとして，「児童の言語生態研究会」の研究と実践の積み重ねを見てみたい。

この会は，上原輝男氏を中心に結成され，1968年には雑誌「児童の言語生態研究」が創刊され，現代にいたるまで15号が刊行されている。毎号必ず記される，「児童の言語生態研究趣意」には，上原氏及びこの研究会の研究の方向が示されている。

「われわれは成育しつつある子どもの言語生態を，正確に見届けることを，何よりの国語教育の基礎に据え，そこから出発すべきであります。遅ればせながら，感情・思考及意識の発達とともにある子どものことばの実態を，調査，研究して，子どもの側からの発言を世に問いたいと思います。思えば，子どもの言語生態とも言うべき基礎資料を得ることなしに，国語教育の目的と方法が論じられすぎました。また，われわれ現場人が，それらの基礎資料をどれほど構えて子どもに接してい

たでありましょう。国語教育の目的と方法及び実践の確立に資すべき，最初の条件であったと思うのであります。」

ここには，学校現場を超えて，生活の場に於いて展開される，子どものことばの姿をありのままに見ていこうとする姿勢が見られる。このことは，次の上原氏の言葉からも見えてくる。「私たちの仕事は，母国語の教育なのである。子どもの魂の成長と一つになっていくことばを母国語という。小学校教師に課せられた最も大きい負担は，教科“国語”のお仕着せではなくてその子どもの母国語発達だと思うことである。（上原（1991）p.3）」

また，「感情・思考及意識の発達」という言葉には，ただ表層の言葉に注目するだけでなく，その根底にある，感情・思考・意識をみていこうとしており，また，発達的な観点もあることが分かる。このことは，次の上原氏の言葉からも，明確に見ることができる。「われわれの研究は，子どもの気の働きや，思い方の変容について，発達的様相を知ることを何よりの急務とした。子ども自身の気の赴くところ，思うところ，思い方，思いの内容以外のところに，彼等たちの自然な言語形成はあり得ないと思うからである。上原（1975）」

以上のことから，「言語生態研究会」の研究は，本論の冒頭に述べた，学習者自身のことばのまなびの変容（発達）を学校内の生活にとどまらず，学校外の生活でのことばのまなびをも視野に入れた研究の先駆として，評価されるべきものであるということができる。

上原氏は，感情を根底に，「感情」「思考」「構え」「言語作業」という四つの分野を言葉の生態の中に設定している。従来の国語教育のほとんどがおこなってきたことは，「言語作業」であるとし，学習者の感情や思考，心の構えを見つめ育てる必要を訴えたのである。「感情・思考・構え・言語作業と四分野に，国語の授業を区別して行うのは，子どもの精神発達の土俵をそう限つてみる方が，子どもたちのだいまの問題点を引き出しやすいからである。（上原（1991）p.19）」

上原氏，及び「児童の言語生態研究会」の研究の積み重ねは，学校教育における国語科授業改善が主流であった，国語教育研究では，大きく生かされることはなかった。しかし，国語教育の研究対象を，より学習者へ，より一生涯へ，より生活へ，と拡大して考えていくとき，これらの研究を足がかりに，国語科の再構築のてがかりとしたい。

4．国語科解体・再構築の方向性

1から見える，国語科の再構築の方向性は次のようにまとめることができる。

(1) 生態という視点

国語科の授業にとどまらず，他教科の授業，授業以外の学校生活，そして，学校外の生活の場面での「ことばの学び」を捉えること（国語学習個体史研究の共時態的拡張）と，その環境と言語主体との相互交渉，相互創造をとらえていくこと。そして，個人と個人をとりまく環境と相互作用，そこに流れる時間とを合わせて，「生態」ととらえ，国語教育の基盤に置く。

(2) 匿名でない個人という視点

「学習者」「子ども」「児童」「生徒」という匿名に抽象化しえない存在としての「個人」の「学び」をとらえていくという視点を持つ。

(3) 生涯発達という視点

学校教育期間にとどまらず，その前後を含んだ，一生涯の「ことばの学びの状況」を捉え（国語学習個体史研究の通時態的拡張），しかも，一方的な価値付けをすることなく，多方面から「ことばの学び」をとらえるという視点を持つ。

さらに，3で見たように，まさしく「生態」という名を冠する「児童の言語生態研究会」の枠組みは，「感情」「思考」「構え」「言語作業」の4つ領域で捉え直すことであった。このことは，「ことばの生態」を踏まえた上で国語科の再構築を考えるためには，これらの領域が欠かせないということを示している。

ただ，これらの領域の提案は，70年代に「児童の言語生態研究会」が行ったものであり，改訂する部分もあると考える。

本稿では，仮説的に次のような枠組みで，国語科の再構築を行ってはどうかという提案を行ってみたい。なお，以下の要素は，「モジュール」といわれるものである。「モジュール」とは，「独立しながらも組み合わせられることでより力を発揮するもの」ということで，以下の各要素も，それ

ぞれが独立したカリキュラムと内容を持つ一方で，実際の授業では組み合わされて実践が行われると一層の力を発揮するものと考えている。

（再構築されたモジュール）

(1) コミュニケーション

これは，「児童の言語生態研究会」の「言語作業」にあたるものである。実用的な，話す・聞く・読む・書くを行うモジュールである。スピーチの仕方，説明文の情報読みの仕方，説明書の書き方，などを学ぶ。

(2) 表　現

これは，「児童の言語生態研究会」の「感情」の一部を発展させたものである。さまざまな感情の表出について知ったり，実際に行ったりする。詩，作文，演劇，だけでなく，絵や音楽とのコラボレーションなどについても学ぶ。

(3) 思　考

これは，「児童の言語生態研究会」の「思考」を受け継いだものである。ここでは，論理的思考の方法，批判的思考の方法などを学ぶ。説明文や評論文だけでなく，あらゆる言語事象を使って，思考を鍛えていく。

(4) イメージ

これも「児童の言語生態研究会」の「感情」の一部を発展させたものである。ここでは，私たちの心の中にうごめく，さまざまなイメージ／イマジネーションについて学び，実践する。例えば，詩を読んでイマジネーションをふくらませる，地域を歩いて，その地域を覆っている民俗学的なイマジネーションを知る，などの実践が考えられる。

(5) 思　想

これは，「児童の言語生態研究会」の「構え」を発展させたものである。私たちの言語行為を裏からコントロールしている，私たちの「心の構え」，それを人によっては，信念とも，イデオロギーとも，素朴理論とも呼ぶだろうが，その「心の構え」について学ぶものである。私たち自身の内面にある，「心の構え＝思想」はどんなものか，他の人々や歴史上の人々，虚構上の人々はどのような「心の構え＝思想」に囚われていたのかを学ぶ。

(6) メディア

これは，メディアリテラシーを身につけるモジュールである。私たちが生涯にわたって出会うであろう，さまざまなメディアについて，どのように受け止めていけばいいか，どのように批判していけばいいかを学ぶ。メディアには，文字言語のものも含まれていると考えたい。

以上のようなモジュールの組み合わせとして，新しい「国語科」を考えていきたいが，まずは，以下のような中・短期戦略を考えている。

（中・短期戦略）

(1) 国語科の「非教科」化

これは，現在の「国語科」から，「評定」をなくさせ，いわば総合的な学習のようにしてしまう戦略である。

(2) 各モジュールの，関係者・学会でのカリキュラム開発をすすめる

各モジュールの内容は多岐にわたり，一つの学会や領域で考えられるものではない。いくつかの学会や領域が，競合的・複合的に，カリキュラムを考えていきたい。

(3) 教科教育研究者による，ただいまの授業研究・教師教育へのサポート

どんなにバラ色の夢を語っても，明日の実践のしんどさは消えるものではない。教科教育研究者としては，現在ただ今悩んでいる，実践者・学習者に対して，共感的／協働的に関わり，支えていく必要がある。なお，このような取り組みのささやかな実践として，以下の研究会がある。

臨床国語教育研究会（http://homepage.mac.com/nanbahirotaka/Personal.html）

このような長期的・中短期的戦略をもって，国語科の解体・再構築に取り組みたい。

参考文献

上原輝男（1975）「感情教育待望論（その一）－人間発言の動機－」『児童の言語生態研究』7

上原輝男監修（1991）『小学校　国語の授業はこうする』学芸図書